

カントのコペルニクスの転回について

香 川 豊

序

カントの所謂コペルニクスの転回と言われる形而上学における思考法の革命は、従来カントの形而上学をどのように捉えるかによって様々に解釈されてきた。我が国では高坂正顕博士以来、カントの形而上学における思考法の革命を「自然科学における実験的方法の形而上学への導入」と解する立場が一つの有力な見解になっている。この小論では、この従来の見解が吟味され、あらためてカントのコペルニクスの転回の本質が考察される。

一

『純粋理性批判』・第二版(1787)の序文において、カントは次のような脈絡の中で自己の形而上学における思考法の革命を語っている。

形而上学の現状を見るに、そこにおいては人々は互いに言い争い、常に行き詰まり、学として確実な道を辿るに至っていない。形而上学はまさに暗中模索の状態にある。そこで、ある幸運な着想に基づいて思考法の革命 ¹⁾ die Revolution der Denkart を成し遂げ、学として確実な道を辿るに至った

1) BXV. 『純粋理性批判』については慣例に従い、第一版をA、第二版をB、と略してその原版の頁を示すことにする。また、カントのその他の著作に関しては、アカデミ版(Kants Gesammelte Schriften, Akademie Ausgabe)の巻数と頁数を以って示すことにする。

数学と物理学のその革命の本質を熟考し、同じ理性認識である形而上学にも類比的の許される限りその思考法の革命を導入することによって、形而上学を学としての確実な道へ導きたいと考え、カントは所謂コペルニクスの転回と言われる形而上学における思考法の革命を提唱するに至った²⁾と。

我々はこの小論でカントのこの思考法の革命の本質を問うことになるのであるが、まず考察の手掛りとして、カントが語る数学、物理学、形而上学におけるそれぞれの思考法の革命を略述することから始めよう。

数学が学としての道を辿るに至った「幸運な着想」(BXI)は、ある人が二等辺三角形の論証を行うに際し、「彼が図形において見たものあるいはまた図形の単なる概念を深ぐり、謂ばそれから図形の諸性質を学び取るのではなく、彼が自ら概念に従ってア・プリオリに考え入れ(構成によって)描出したものを通して図形の諸性質を産出しなければならない」(BXI—XII)と気付いたことに基づく。つまり、「何ものかを確実にア・プリオリに知るためには、彼が自己の概念に従って自ら事象の内に置き入れたものから必然的に帰結するもの以外は何物もその事象に付加してはならない」(BXII)と言う点に、数学における思考法の革命の本質があるのである。幾何学の証明に際して、我々がその証明の根拠として「図形において見たもの」を使用していないことは、たとえば、黒板に描かれた三角形が常に正確な三角形を表現し得ないということもさることながら、その図形が不正確であろうとも、数学者にとってその三角形は三角形として通用するのであり、その三角形において数学者は三角形の諸性質を正しく示すことができる、と言う事実によって窺い知ることができる。また同様に、我々が「図形の単なる概念」から図形の諸性質を学び取ることができないことも、たとえば「三角形の内角の和は二直角である」と言う幾何学の命題が単なる矛盾律によって説明し得ないということから窺い知れる。なぜなら、論理的には、主語・「三角形」は相異なる三つの述語—(i)「内角の和は二直角より大である」、(ii)「内角の和は二直角である」、(iii)「内角の和は二直角より小である」—を同等の権利を

2) BX—XI.

以って付加することができ、主語・「三角形」と述語・「内角の和は二直角である」とは論理必然的に結合されていないからである。数学者はその幾何学的命題の証明に際し、まず「三角形を構成することから始める。彼は一本の直線上の一点から引かれ得るすべての接角の和が常に二直角になることを知っているので、その三角形の一辺を延長し、二直角に等しい二つの接角を手に入れる。次に彼は三角形の対辺に平行な一本の直線を引いて二つの接角の外角の方を分割する。そうすると、二つの内角の内の方に等しい一つの外接角がここに生じることがわかる等々。彼はこのようにして常に直観に導かれながら推論の連鎖を辿り、この問題の極めて明白なまた同時に普遍的な解決に至るのである」(A716, B744)。つまり、我々は幾何学において、「自らの概念に従ってア・プリオリに考え入れ（構成によって）描出したものを通して図形の性質を産出」するのである。上記の幾何学の例に見られる「構成 Konstruktion」の方法こそ数学における思考法の革命の本質であり、数学における「置き入れ」の方法である。

ところで、カントはこの「置き入れ」の方法を物理学においても見出す。

「経験的な諸原理に基づく限りでの」(BXI) 物理学を見るに、その思考法の革命の本質は、「理性自身が自然の内に置き入れたものに従って、理性が自然から学ばねばならないもの、そして理性がそれ自身だけではそれについて何事も知らないであろうようなものを、自然の内に求める」(BXIII—XV) と言う点にある。このような革命が可能になったのは、たとえば、「ガリレイが自ら選んだある重さの球を斜面にころがり落とし」(BXII) たとき、彼が次のこと、すなわち、「理性は自ら自己の企画に従って産み出したもののみを洞察すること、理性は恒常不変な法則に従う自己の判断の原理をもって先導し、自己の問いに答えるよう自然を強制しなければならぬ。……なぜなら、さもなければ予め企画されたいかなる計画にも従わないで偶然的になされた諸観察は、一つの必然的法則においてまとまり合うことがなく、し

3) この「構成」の方法は代数学においても同様に見出される。Vgl. G. Martin; Immanuel Kant, Berlin 1969, S. 25.

かも、理性が求め必要としているのはそのような必然的法則であるからである。理性は一方の手に、それに従ってのみ互いに一致する現象が法則と見做され得るような自己の原理を持ち、他方の手に、理性が自己の原理に従って考え出した実験を携えて、自然に向かって行かなければならない。それはもちろん、自然から教えられるためではあるが、先生が望むことを何でも言わされる生徒の資格においてではなく、証人をして自分が出した質問に答えるよう強要する正式の裁判官の資格においてである」(BXIII) と言うことに気付いたからである。カントは物理学における「置き入れ」の方法を「実験的方法 Experimentalmethode」(BXIII Anm.) とも呼ぶが、この方法の特性は次の例が雄弁に物語っている。—ガリレイがピサの斜塔からそれぞれ重さの違う物体を落下させたとき、それぞれの物体は絶対的に同時にではなく、僅かな時間の違いを以って地上に達することが観察された。ガリレイに敵対する者達はその観察事実について、物体はその自然本性に従って運動するものであり、その自然本性により、重い物体は下方へ、軽い物体は上方へ運動する。軽い物体は上方に運動するよう努めるのであるから、重い物体は軽い物体より速く落下すると、アリストテレス・スコラの運動論を展開した。しかし、ガリレイはその同じ観察事実について、すべての物体は等速度で落下するものであり、落下の時間差はその空気の抵抗に起因すると主張した。⁴⁾—すべての物体が等速度で落下するということを、我々は直接現象において観察することができない。それは、たとえ経験への考慮を必要とするにしても、理性が自らの企画に従って産み出したものであり、理性の本来的行為に属する。そうして、実験においては、この法則とそれから必然的に帰結するものが洞察される。近世自然科学における実験は単なる偶然的な諸観察に支えられた物についての情報収集ではない。それは理性の原理に基づいて考案され、実験においては、観察を通して見られた事実⁴⁾に反してすら理性の企画の内で先き取りされた物体の本質規定が洞察される。

カントは以上のように、数学と物理学の思考法の革命の本質を「置き入

4) Vgl. M. Heidegger (1); Die Frage nach dem Ding, Tübingen 1962, S. 69—70.

れ」の方法—数学においては「構成」の方法、物理学においては「実験的方法」と言われた—と規定したのち、その実例に倣って形而上学における思考法の革命を次のように提唱する。

「これまで人は、我々のすべての認識は対象に従わなければならない、と想定した。しかしこうした前提のもとでは、我々の認識がそれによって拡張されるような何ものかを、対象についてア・プリアリに概念によって作り出そうとするすべての試みは失敗した。それ故、形而上学の課題において、我々が今度は、対象が我々の認識に従わなければならない、と想定することによって、もっとよく前進しないかどうか試みてみよう。この想定は既に、対象が我々に与えられる以前に対象について何ものかを確定すべきところの対象のア・プリアリな認識の望みどおりの可能性に一層よく合致する。このことはコペルニクスの最初の着想と同じ事情にある。コペルニクスは、全星群が観察者の周りを回転すると想定したのでは、天体の運動の説明がうまくゆかなかったので、観察者を回転させ、逆に星を静止させたなら、もっとうまくゆくかどうか試みたのである」(BXVI) と。

このような思考法の革命こそカントの所謂コペルニクスの転回と言われるものであるが、我々はこのコペルニクスの転回と言われるカントの思考法の本質を問うにあたり、次の二つの問い—

- i) なぜカントは自らの立場をコペルニクスの立場に比したのか、カントとコペルニクスの中に考えられる類比の問題。
- ii) なぜカントは数学と物理学の思考法の革命を自らの形而上学における思考法の革命に比したのか、数学、物理学、形而上学の三者の中に考えられる思考法の革命の類比の問題。

—を軸にして考察を進めてゆくことにしたい。

二

カントとコペルニクスの場合—見認識と対象との関係が逆になっているよ

うである。なぜなら、コペルニクスの場合は観察者が星の周りを回転するのであるから、カントの場合とは逆に認識が対象に従っていると考えられているように見えるからである。ではカントとコペルニクスとの間にはいかなる類比が考えられるのであろうか。

たとえば、高坂正顕博士は、「カントは彼による哲学的方法の変革をコペルニクスの天文学上のそれに擬らえた。天体が地球を巡るのではなく、地球が天体に対して運動するのである。そのように認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従ひ、即ち認識が対象に対して受動的ではなく、却って能動的であり、運動的であると想定することによって、カントは対象の問題を解決せんとした……。所謂コペルニクスの転向 *Kopernikanische Wendung* の名の起る所以である¹⁾」とその類比を説明される。この見解によると、「地球が天体に対して運動する」とことと「認識が対象に対して運動的である」とこととの間にカントとコペルニクスの類比が成立することになるが、しかし、「認識が対象に対して運動的である」とは、上記引用文に続く高坂博士の叙述の文脈から考えると、「我々は自ら物に置き入れたもののみを、物についてア・プリオリに認識する」(BXVIII)と言うカントの形而上学における新しい思考法を指していると考えられるので、この連関からすると、むしろコペルニクスが観察者を回転させ、星を静止させると言うことを初めて着想した場合に、その着想を可能にした思考法、換言すれば、コペルニクスが「感性に反してはいるが真なる仕方で、観察された運動を天空の諸対象の内ではなく、その観察者の内に求め」(BXXAnm.)たことに、その両者の類比を求めるべきではなからうか。

もっともどこにその類比が成立するかは色々見解のあるところで、たとえばペートンやスミスの見解を支持して岩崎武雄博士は、「コペルニクスは天体の見かけ上の運動を地球上の観察者の運動によって説明したのであるが、カントもまた見かけ上対象の持っている性質を主観の働きによって説明しよ

1) 高坂正顕(1)；『カント』・高坂正顕著作集第二巻・理想社、77頁。

うとした²⁾とその類比を説明されている。「天体の見かけ上の運動」において、ペートンが自ら運動することのない恒星の見かけ上の運動を予想している³⁾ように、この場合の天体の運動は実際の天体の運動とは異なる我々にとっての現われとしての天体の運動である。このような運動は一つの仮象として運動する地球上の観察者に帰せられるものと考えられるが、しかし、カントの認めるところによると、コペルニクスは天体の見かけ上の運動をもたらす感覚的経験に反してすら観察された天体の運動を正しい仕方⁴⁾でその観察者の内に求めたのではなかったか。問題になっているのは見かけ上の天体の運動と我々観察者との関係ではない。また「見かけ上対象の持っている性質」においても、ペートンは物自体が空間的・時間的なものでないのに我々にそのように見えると言う例を語り、その見かけ上の対象の性質が我々人間精神の本性に帰せられるべきものであると解しているが、カントの形而上学における思考法の革命は対象のア・プリオリな認識の可能性に関わるものであり、そこで問題にされるのは、対象の見かけ上の性質と我々主観の働きとの関係と言うよりも、むしろ真なる対象の在り方と我々主観の働きとの関係と言える。

上記二様の見解はいずれも類比成立の場面を取り違えている。

ところで、黒積俊夫氏は上記二様の見解を、カントまたはコペルニクスのどちらかに引き寄せた上で両者の類比を整合的に解釈しようとするものでありと批判され⁶⁾、次のようにその類比を説明される。すなわち、「コペルニク

2) 岩崎武雄：『カント「純粹理性批判」の研究』・勁草書房、26頁。

cf. H. J. Paton; *Kant's Metaphysic of Experience*, New York 1965, p. 75.

N.K. Smith; *A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason*, New York 1962, p. 24ff.

3) H. J. Paton; *ibid.*

4) BXXII Anm.

5) H. J. Paton: *ibid.*

6) 黒積俊夫：「コペルニクス転回」考・九州大学教養部「テオリア」第十九号、2～3頁。

スにおいては、一見常識には反するものの地球を運動させ、反対に太陽を静止させた上で、不動の太陽の立場からその周りを回転する惑星の運動を眺めたように、カントにおいては、一見常識には反するものの認識と対象との関係を逆転させ、対象が認識に従わねばならぬと考えるとともに、対象を動かす自らは動かぬ中心（それが何かは未だ不明であるが）の立場から対象の性質や関係を眺める、という仕方です。両者の間に類比が成立するように思われる。重要なのは、常識に反する逆転を試みるということだけが「コペルニクスの転回」の内容を成すのではなく、その逆転とともに、自らの眺める立場を転換して、不動の中心の立場から対象を眺めねばならぬ、というこの第二の点がその不可欠の要素を成していることである。……「立場の転換」というこの要素を「逆転」という要素と合わせて考えることによって初めて……両者の類比が成立し得ると考えられる。しかし、それでは形而上学におけるカントの立場の転換とは何を意味するのか⁷⁾、カントの「批判前期の、物を神的悟性に対する物として把える立場は即ち物自体の認識を物の認識と解する立場であり、この立場においては物の客観的認識、換言すれば物に関する先天的認識は端的に不可能である、恰も、地球の立場から惑星の運動の客観的認識が不可能であるように。そして、惑星の運動の客観的認識が太陽の立場において初めて可能であるように、物（但し、現象としての物）の先天的認識は物を人間悟性に対する物として把える批判期の立場において初めて可能である⁸⁾」と。黒積氏は「逆転」と言う要素に「立場の転換」と言う要素を導入され、カントとコペルニクスとの類比を前記二様の見解よりより整合的に解釈されているが、しかし、この場合問題にされているのはあくまでそれぞれの「立場の転換」を可能にした思考法の革命の間の類比ではなかったか。コペルニクスにおける地球の立場から太陽の立場への転換、カントの批判前期から批判期への物の把握における立場の転換、これらの転換を可能にした思考法の革命の類比こそいまカントとコペルニクスとの間で問題にされ

7) 同上、10—11頁。

8) 同上、15頁。

ている類比なのである。黒積氏の見解においては、カントの思考法の革命と類比を以って語られるコペルニクスの立場の転換を可能にした彼の思考法の革命がその類比の説明において明確にされていないように思われる。では宇宙全体のプトレマイオスの表象からコペルニクスの表象への転回を可能にした思考法の革命とはいかなるものであろうか。

「全星群が観察者の周りを回転する」と言うプトレマイオスの表象の内には、ちょうど物体の運動の規定を経験から出発し物体の自然本性の内にも求めるアリストテレス・スコラの運動論におけるように、経験に即しながらも対象から対象の本質的规定を汲み取ると言う思惟の根本的態度が支配している。しかしこれに対し、「観察者を回転させ、反対に星を静止させる」と言うコペルニクスの表象の内には、対象の本質的规定を「天空の諸対象の内ではなく、その観察者の内にも求める」と言う思惟の新しい態度が生起している。前者は対象の本質的规定を対象から汲み取ることにおいて、自然科学的表象を通してではあるが、「認識が対象に従う」と言う立場を表明しており、これに対して後者が、同じく自然科学的表象を通して「認識に対象に従う」と言う立場を表明していると見做されるならば、我々はそれぞれ立場の転換を可能にした思考法の革命においてカントとコペルニクスとの類比を整合的に説明し得ることになる。ではコペルニクスの表象を支配している思惟の根本的態度とはいかなるものであろうか。

ガリレイは『新科学対話』において、「若し任意の物体が何等かの摩擦なしに、水平面に沿うて投げられたものと〈想定 *mente concipio*〉すれば、以上に於て十分説明したことから、この物体は同じ平面に沿ひこの平面が無⁹⁾限であれば、等速、かつ永久に運動を継続することが知られる」と語るが、ハイデッガーは引用文中の「精神において想定すること *mente concipere*」をおおよそ次のように解釈している。すなわち、その想定することにおいて

9) ガリレオ・ガリレイ著・今野武雄、日田節次訳；『新科学対話』・下巻・岩波文庫、154頁。なお、引用文中の〈 〉の中には筆者による挿入である。以下筆者による引用文中の挿入は同様に示すことにする。

は、ある根本見取図の内で物体のすべての規定を予示することを可能ならしめるような、物体の本質（物体性）の先取的認識の公理的企投が考えられている。その企投によって物体は時間・空間的に相連関する質点の運動連関として統一的に表象される。自然はその企投に基づく根本見取図の内で一様な時間・空間的運動連関をもった領域として限界付けられ、物体はその領域の内に組み込まれ、支えられて、初めて物体であり得ることになる。自然科学における物体とはまさにこのような領域の内で自らを示すものであり、それらがいかに自らを示すかは根本見取図の内に予示され、根本見取図を通してその自らを示すものの受け取り方、探知する仕方が規定される。そしてこの探知する仕方こそ実験である¹⁰⁾。

ハイデッガーは、それを通してすべての自然事象が眺められる根本見取図を予め企図するような思惟の働き（公理的企投）をガリレイの「精神において想定すること」の内に見出し出している。近世の自然科学を支えているこのような思惟の態度は、近世の自然科学的思惟の根本的態度としてコペルニクスの表象の内にも働いていなければならない。「真なる仕方では、観察された運動を天体の諸対象の内ではなく、その観察者の内に求める」コペルニクスの場合も、「観察者の内に求める」と言うその思惟の態度において公理的企投の存在を告知している。そうすると、コペルニクスの表象の内にも働いている思惟のこの根本的態度から、コペルニクスの表象は自然科学的表象を通して「認識に対象が従う」と言う立場を表明するものと言えよう。なぜなら、「観察者の内に求める」ことが、あの思惟の企画の内で物体の本質が先取され、その企画において輪郭付けられた領域の内に物体が組み込まれ、支えられて、物体が初めて物体として可能になることを意味するのであれば、それはやはり「認識に対象が従う」と言う立場を表わすものと言いうことができるからである。カントとコペルニクスとの間には完全に類比が成立し得る。いや、コペルニクスの表象の地盤を準備した思考法の革命（実験的方法）の内に働く公理的企投は、ハイデッガーによると同時に近世的思惟の一

10) M. Heidegger (1); a. a. O., S. 70—72.

つの根本動向を示しており、しかも近世形而上学も同じ根本動向の内に生起するのであれば、¹¹⁾カントの形而上学における思考法の革命とコペルニクスにおける思考法の革命とが、形而上学と自然科学における学問的な性格の相違、その認識対象と認識様式の違いにもかかわらず、同列に置かれ類比を以って語られることも首肯され得るであろう。カントの思考法の革命も、コペルニクスの思考法の革命も、同じ近世的思惟の根本動向の内に生起しており、まさにそれ故に両者の間の「事情は同じもの」(BXVI)と言われるのである。¹²⁾

カントとコペルニクスとの間に上記のような類比が成立するとして、次に我々は、数学と物理学における思考法の革命とカントの形而上学における思考法の革命との間にいかなる類比が成立するかを考察しなければならない。

三

数学と物理学における思考法の革命は「置き入れ」の方法—数学においては「構成」の方法、物理学においては「実験的方法」と言われる一の発見に基づくと考えられたが、カントの形而上学における思考法の革命も、「我々は自ら物の内に置き入れたもののみを、物についてア・プリオリに認識する」(BXVIII)と言うことの内に見い出されるのであるから、同じく「置き入れ」の方法の発見にその革命が基づくと言えよう。そうすると三者の間に「置き入れ」の方法に基づいて互いの類比が成立するように思える。しかし、同じ「置き入れ」の方法と言われても、数学は「構成」の方法、物理学

11) M. Heidegger (1): a. a. O., S. 74, 75.

12) 近世的思惟の根本動向の内に立っているのは、ガリレイやその他の自然科学者も同じであるが、コペルニクスの所説が宇宙の体系を決定的に変えるような新しい世界像をもたらすことによって、いちはやく自然科学における近世的思惟の誕生を告げたと言う事実と比して、カントはいまや対象認識の仕方を決定的に変える思考法の革命を通して新しい世界像をもたらさんとする自己とコペルニクスとを比べたものと思われる。

は「実験的方法」と解されるように、それぞれの学問の性格の相違から当然それぞれの方法は互いにその固有性を具えており、それぞれ別の方法と解される側面を持つと予測される。ところで、我々はカントの形而上学における思考法の革命を自然科学における実験的方法の形而上学への導入と解する我が国におけるカント解釈の代表的見解を知っている。そこで三者（数学、物理学、形而上学）の間の思考法の革命の類比を問うに先き立ち、この代表的見解を吟味してみよう。

高坂博士はカントのコペルニクスの転回を自然科学における実験的方法の形而上学への導入と解され、形而上学における「置き入れ」—高坂博士は「投げ入れ」とも称される—の方法について次のように語っておられる。すなわち、「注意深く〈純粹理性批判〉第二版の序文を読まれた人は、そこに「……彼等〔数学と自然科学〕にとってかくも有利な結果を齎した思考法の変革の要点を熟考し、且つ理性認識として、形而上学との類推を許す限り、その点に於いて少なくとも試みに、模倣して見よう」(BXVI)という言葉のあったことを見逃されないのであろう。数学及び自然科学に於ける思考法の¹⁾変革とは、既に述べた如く、²⁾投げ入れの方法を用うることである。実験的方法を用うることである。即ち哲学の対象が素材としての経験であるときに、その経験をば投げ入れの方法によって理解せんとするのである。しかれば、「何」に対して「何」を投げ入れることによって、所謂経験を内面的に理解せんとするのであるか。投げ入れられる場所は「直観に於いて与えられる雑多なるもの」であり、投げ入れられるものは「直観の形式たる時間及び空間と純粹悟性の諸概念」である。しかればそれは如何なる点に於いて実験的方法と類似をもつのであるか。投げ入れるということは、如何なる点に於いて実験的方法と類似するのであるか。実験的方法とは³⁾理性の計画を対象の内に置き入れることによって、対象の理性的なる性質を見いだすことである。ガリレイの場合、トリチェリーの場合、またシュタールの場合、皆すべて自然をして理性の計画に従わしめ、それによって自然の理性的なる素質を実証せんとすることなのである。それは自然が理性的なることを、言わば自然をし

て告白せしめることなのである。しかしそれは自然の内から理性的なるものを引き去るときに、自然そのものが成立しないことを実験することによって実証せられるのである。ここに実験的方法なるものの意味がある。しからはカントは経験そのものに対して、かかる実験的方法を適用したであろうか。我々は批判の本文に於いて、いかに知覚の世界が初めて時間と空間によって成立し、更に経験の世界が悟性概念によって初めて成立するかを、彼が証明せんと試みたかを熟知している。知覚の世界から時空の形式をのぞいたら何が残るか。また経験の世界から悟性概念を除いたら何が残るか。これに反して、時空の形式を「感覚の雑多」に投げ入れるならば何が生ずるか。更にそれに加えるに悟性概念を以てすれば如何なる結果が生ずるのか。カントの言葉を誦するなら純粹理性の実験 dieses Experiment der reinen Vernunft (BXX) を試みることによって、彼は経験そのものの構造を明らかにせんとし、またそれによって、悟性概念の确实性、客観妥当性を証し、よってもって先天的認識を哲学の体系の内に包含し、かくてまた自然科学を基礎づけたとしたのである。これは明らかに一つの実験的方法の哲学に対する適用であったであろう¹⁾。「自然科学の対象は自然科学的方法を適用することによって我々に認識される。実験によって理性的なるものを投げ入れ、それによって対象を認識するのである。カントは今この同じ方法を哲学に於いて用いんとする。かくの如くに方法が互いに類似せるものであるならば、与えられた対象が自然科学と哲学とに於いては異なるのでなければならぬ。同じ一つの対象であるとしても、その探究される段階が異なるのでなければならぬ。哲学に於いて与えられた対象とは如何なるものであるのか。自然科学に於いて明らかにせられる対象は、所謂経験に於いて与えられる対象そのものではない。むしろそれに対して学的労作を加えることによって見いだされるところのものである。言わば第一次の対象ではなくして第二次の対象である。しからは第一次の対象を明らかにする学はないのであるか。所謂与えられたと称せられる対象を、更にその根柢に立ち到って、理解せんとする学はないであ

1) 高坂正顕(2)；『カント解釈の問題』・高坂正顕著作集第三巻・理想社、42～43頁。

ろうか。自然科学は経験的な世界を明らかにするという。しかしながら彼等のなすところは、経験的な世界を更に法則的な概念の内に統一することによって、言わば表面に向かって理解して行くのである。これに対して所謂経験の世界をその内部に向かって理解して行く学がないであろうか。経験の世界を、何か理性的なるものを、その内に置き入れることによって理解せんとする学がないであろうか。ここに少なくとも形而下の学に対する形而上の学が成立する余地があるであろう。ここに哲学の領域が存しないか。経験は自然科学に対しては探究の出発点であるけれど、哲学にとっては、探究の課題であり、帰着点である。自然科学によって見いだされるところの対象は、自然科学的方法の下に立つ経験界であるに対して、哲学によって見いだされんとするところの対象は、自然科学の材料となり得る経験界である。言わば自然科学の対象が構成せられた経験であるのに対して、哲学の対象は素材としての経験である。哲学はこの素材としての経験を理性的なるものを置き入れることによって理解せんとするのである²⁾と。

高坂博士は自然科学と形而上学との対象の相違を認めながらも、「置き入れ」の方法と言う学の方法の共通な性格付けに基づいて、自然科学と形而上学が同じ実験的方法を用いていると主張される。カントも自ら形而上学における自己の思考法を、「この自然科学に倣った方法は、純粹理性の諸要素を実験によって確証されあるいは否定されるものの中に求めるところに成り立つ」(BXVIII Anm.)とか、「純粹理性のこの実験は、往々還元の方法、一般的には総合的方法と称される化学者の実験にたいへん類似している」(BXXI Anm.)と述べているのであるから、この際、形而上学における革命された方法を実験的方法と称しても何等差し支えないように見える。しかし、形而上学における「置き入れ」の方法はア・プリオリな認識との関わりで語られるのに対し、物理学における「置き入れ」の方法が語られる場合にはア・プリオリな認識と言う言葉が省かれて³⁾いる。むしろそこでは経験

2) 同上, 40~41頁。

3) Vgl. BXIII—XIV ; BXVIII.

的な諸原理に基づく限りでの物理学における実験的方法が問題にされてい⁴⁾た。そうすると、同じく実験的方法と称し得たとしても、それらの間には単に「構成せられた経験」と「素材としての経験」と言う対象の違いによっては明らかにされないある決定的な相違があるのではなからうか。我々は「置き入れ」と言うことに関して両者の類似性を認めるにしても、それぞれの「置き入れ」の方法を吟味しなければならない。

たとえば、ニュートン物理学における「すべての物体はその静止の状態を、あるいは直線上の様な運動の状態を、外力によってその状態を変えられない限り、そのまま続ける」と言う公理は物理学の原理として観察や実験の結果から一般化（帰納的一般化）されたものではない。それは物の本質的規定の先取として理性によって予め企画され産み出されたものである。しかし、ニュートンの公理系つまり一群の公理、定義、定理からなる演繹体系は、一定の手續を以て物理的世界の事象と結び付けられており、たとえばある定理が実験を通して観察される物体の運動と一致することが確認されるというような構造を持っている。このニュートンの公理的方法においては経験の観測可能な与件と公理系は区別されており、公理系は測定によって感覚可能なもの世界から汲取られるのではなく、むしろ測定されるものが公理系を前提にしている。つまり公理系は理性によって観測可能なもの内に置き入れられるのである。公理と言う自然探究における相対的に固定された立脚点の選択は最初から自然現象と結び付けられるのではない。その選択に際し経験への考慮がなされるとしても、選択自身は理性の本来的行為たる思惟に属している。そしてその選択と共に我々は新しい物理的世界像に出会うのであ⁵⁾る。カントは物理学における思考法の革命を語る際に、自然科学のある公理系における演繹結果が実験によって確認される場合の例（たとえばガリレイの落体の実験やトリチェリーの気圧の実験）を挙げており、公理系の観測可

4) BXI.

5) ニュートンの公理的方法については、ジョン・P・ローゼ著、常石敬一訳；『科学哲学の歴史』・紀伊国屋書店、102頁以下を参照した。

能なものへの置き入れと実験による法則の確認⁶⁾と言うニュートン的な公理的方法の本質を実験的方法と称したと考えられる。

ところで、カントの実験的方法をニュートンの公理的方法と関係付け以上のように解釈し得るとするならば、高坂博士の言われるように、「実験的方法とは理性の計画を対象の内に置き入れることによって、対象の理性的なる性質を見いだすことである」と考えられ得るようである。なぜなら、「理性の計画」とは理性に基づく公理系の設定と解釈でき、「置き入れ」とは設定された公理系を物理的世界における事象の法則とすることであり、そうした法則に従った物体の在り方を「対象の理性的性質」と言い得るからである。しかしたとえそのように解釈し得るとしても、物理学の実験について、「自然の内から理性的なものを引き去るときに、自然そのものが成立しないことを実験することによって実証せられる」と高坂博士が語られるとき、この場合の実験は物理学における実験を正當に言い表わしていない。なぜなら、物理学の実験によって確認されるのは、たとえば公理系におけるある定理と観察される物体の運動との一致であり、それによって対象の理性的な性質が認識されるとしても、高坂博士の言われるように理性的なものである一群の公理を自然から引き去るならば、物理学における実験そのものが成立しなくなるのであるから、自然そのものの成立に関わるような理性的なものを自然から引き去ると言うような実験は、物理学における本来の実験とは言い難いからである。高坂博士の言われるような実験は、物理的な世界像を決定するような自然探究の立脚点の選択において思想的に可能な実験として考えることはできるが、カントが『純粹理性批判』において実験的方法との関係で語る実験例とはその性質を異にする。高坂博士の自然科学の実験の解釈は、カントが空間・時間、カテゴリーを経験の可能性の形式的制約として析出する場合の議論つまり形而上学における「置き入れ」の方法に引きつけた解釈になっている。また、高坂博士は、自然科学における対象を「構成せられた経

6) カントが物理学の思考法の革命において語る、「理性は自らの企画に従って産み出したもののみを洞察する」(BXIII)とはこのことである。

験」, 形而上学における対象を「素材としての経験」と区別されるが, 自然科学的経験の基礎になっている日常的経験を「素材としての経験」と解するならば, 「素材としての経験」は決してカントの形而上学の対象ではない。カントにおける経験の対象はニュートンの原理によって理解される自然物であり⁷⁾, 「カントの眼差しは直ちに数学的・物理学的な学の対象としての物に針付けになる」⁸⁾のである。カントによると, 『純粋理性批判』の先験的感性論と先験的分析論は自然科学が前提にしているア・プリオリな原理そのものを自然科学から引き離して独立に取り扱っており⁹⁾, そこで挙示される諸原則(経験を可能ならしめるような諸原則)は, 既に物理学者が自然の考察において経験を作り出す場合に「不可欠な手引」(B.d XX, S. 318)として使用しているにしても, 物理学の公理とは異なって, それらの原則は個々の経験に関わると言うよりむしろ経験一般(経験の野)に関わるものと考えられている。高坂博士の言われるように, カントは形而上学において「素材としての経験」に関わっているのではなく, 経験一般の可能性に関わっているのである。それ故, 自然科学の対象と区別して形而上学の対象を「素材としての経験」と解するのはカント的でないと言えよう。最後に, 『純粋理性批判』における経験がなによりもまずニュートンの原理によって理解される自然物の経験を意味するとしても, カントが空間・時間・カテゴリーを経験の可能性の形式的制約として折出し, ア・プリオリな総合的判断を経験一般のア・プリオリな形式(原則)として挙示することにおいて, 高坂博士の言われるように直ちに自然科学の基礎付けを目指しているとは言い難い。カントが『純粋理性批判』において自ら表明する彼の先験的哲学は「存在論 *Ontologia*」(A 845, B 873)であり, その学の必然性と役割は人間理性のより高次な関心に基づくもので¹⁰⁾, 決して自然科学の基礎付けを第一の目的とするものでは

7) Vgl. M. Heidegger (1); a. a. O., S. 98.; G. Mortin; a. a. O., §. 11.

8) M. Heidegger (1); a. a. O., S. 100.

9) Bd. XX, S. 316.

10) Bd. XX, S. 315; Vgl. M. Heidegger (2); Kant und das Problem der Metaphysik, 3Aufl., Frankfurt/M 1965. S. 18.

ない。カントがその存在論において直ちに自然科学的な経験に眼を向けるのは、存在論における存在者への関わりの本質の開明と言う課題にとって、自然科学者達がある指標を与えてくれるからである。¹¹⁾ さきに述べたように、近世の自然科学的思考を支えている公理的企投において物体の本質の規定は先取的に認識され、それによって初めて物体の認識が可能になった。自然科学における公理的な方法においては、物体の本質の規定の先取的認識（公理）と物体の経験は区別され、前者が後者を可能にすると言う制約連関が働いている。そうして、この制約連関が存在論における存在論認識と存在的認識の—カント的な表現に従えば先験的真理が経験的認識を可能にすると言う—制約連関への指標を与えてくれるので、カントは直ちに自然科学的な経験へとその眼差しを投げるのである。ところで、『純粹理性批判』の先験的感性論と先験的分析論で展開される形而上学の第一部門（存在論）は、一定の経験的対象に直接関与することなく自然一般を可能ならしめるような諸法則を問題にするのに対し、これらの法則が外官の対象に適用されたものが物理学、内官の対象に適用されたものが心理学であるとカントは考えている。¹²⁾ そうすると、形而上学の第一部門は直ち物理学の対象に関わると言うより、物理学の対象と心理学の対象を含めて科学的に探究され認識される対象一般に関わると言えよう。つまり、形而上学の第一部門は、物体が何であるかを語る物理学の原理的な部門に先き立ち、物体も含めて対象一般の先取的な認識（自然一般を可能ならしめるようなア・プリオリな原則）を主題的に考察するのである。自然とは存在者が自らを対象として我々に示す場であり、自然一般を可能ならしめる諸原則を問うことは、存在者が自己を我々に対する対象として開示する場の構造を明らかにすることに他ならない。そうしてこの場の構造認識こそ『純粹理性批判』において語られる経験一般のア・プリオリな形式（原則）の予料なのである。カントの形而上学の第一部門は、自然一般を

11) Vgl. M. Heidegger(2) ; a. a. o., S. 20.

12) Vgl. A146, B185.

13) Bd. IV, S. 470.

可能ならしめる諸原則が我々によって経験一般のア・プリオリな形式として予料されると言うことを示すことによって、我々の存在者への関わりの本質の解明と言う存在論の課題を引き受ける。そしてそれらの諸原則（存在論的認識）に基づいて、存在的認識たる自然科学の原理的な部門も可能になるのであるから、形而上学の第一部門（存在論）は第二次的に自然科学の基礎付けに関わると言えよう。¹⁴⁾ 空間・時間、カテゴリーを経験の可能性の形式的制約として析出し、経験一般の構造を明らかにすること—高坂博士が形而上学における実験的方法について純粹理性の実験として述べられた事柄は我々においてはむしろこのことを指すことになる—がカントの批判において本質的な役割を担うことは筆者も認めるところである。¹⁵⁾ しかし、(i)高坂博士の解される実験がカントの語る物理学における実験と違った意味に使用されていること、(ii)博士が持ち込まれた「構成された経験」と「素材としての経験」との区別がカントにおいて維持し難いこと、(iii)カントの形而上学の第一部門は存在論であり、博士の言われるように単に自然科学の基礎付けを目指すものでないこと、以上三つの理由から、我々は高坂博士の言われるように、カントのコペルニクスの転回を自然科学における実験的方法の形而上学への導入と解することはできないと考える。

ところで、岩崎博士は、カントのコペルニクスの転回と自然科学における実験的方法の形而上学への導入とを区別され、高坂博士とは異なった観点から自然科学における実験的方法の形而上学への導入を評価しようとされる。そこで次に岩崎博士の見解を問題にしてみよう。

岩崎博士は、カントのコペルニクスの転回を認識論的主観主義の思

14) 自然科学（その原理的な部門も含めて）は個々の物への関わりを排除しないが、存在論はそのような物を抽象して物一般 *Dinge überhaupt* を取り扱うと言う両学問の相違 (Vgl Immanuel Kant's *Vorlesungen über die Metaphysik*, 2 Aufl. nach. der Ausgabe von 1821, neu herausgaben von Dr. K. H. Schmidt, S. 12.) を保持した上で、我々はこのような基礎付けを認める。

15) この本質的な役割については、拙稿「先験的な問い」と『批判』・甲南女子大学人間科学年報・創刊号を参看されたい。

想—認識論的主観主義の思想とは「われわれは、われわれの主観から独立に客観的に存する対象をそのあるがままに認識するのではなく、われわれの主観のうちに先天的に存する認識の形式によってわれわれに与えられる素材を秩序づけ統一づけ、それによっていわゆる対象というものが構成される、と考える考え方である¹⁶⁾」—と解される¹⁷⁾。この思想は、自然科学における実験的方法の形而上学への導入と言うカントの意図を遂行するためカントが考え出したものであり、高坂博士とは異なってカントのこの意図とこの思想とは互いに両立し得ないと言われる¹⁸⁾。ではなぜ両立し得ないのか。

自然科学における実験的方法は、「われわれがあらかじめ理性によって考えたことを対象のうちに投げ入れてみることによってその考えの正否を検討するということであった。しかしこのことが可能であるためには、あらかじめ理性によって考えられたことが経験の対象によって確かめられるような性質のものでなければならない」。実験的方法において投げ入れられるものは「経験から全く独立な主観の先天的形式というようなものでなく、経験的要素を含んだものであることを必要とする¹⁹⁾」。ところが認識論的主観主義の思想においては「先天的な主観の形式の投げ入れ」が行われるのであり、「投げ入れられるものは決して経験的要素を含むものではなく、全く経験から独立な主観的原理なのである²⁰⁾」。実験的方法において対象の内に投げ入れられるものが「経験的なものであるが故にこそ、実験によって吟味することができたのである。だが認識論的主観主義のように、主観の先天的形式を投げ入れることによって対象が構成されるのであると考えるならば、われわれはいかにしてもこの考え方が正しいかどうかを吟味することができない²¹⁾」。カン

16) 岩崎武雄；前掲書25頁。

17) 同上，26頁。

18) 同上，7頁。

19) 同上，27頁。

20) 同上，28頁。

21) 同上，46頁。

トは実験不可能なものを認識論的主観主義において投げ入れ実験しようとする原理的な矛盾を犯しており、両者は決して両立し得ないのである。ではなぜカントがそのような誤りを犯したかと言うと、「カントにおいて学問的意義を有する確実性を持った認識は先天的認識でなければならないという考え方が牢乎として抜くべからざる信念として存在していた²²⁾」からである。カントは両者を混同し、「カントにおいて実験的方法と認識論的主観主義の思想が結びつけられる。むしろ、両者は同一のものと考えられる。認識論的主観主義が成立しなければ、つまりわれわれが先天的な認識形式を持ち、それによって対象を構成するのでなければ、数学や自然科学における実験的方法もまた成立しないと考えられてしまったのである²³⁾」。では「この認識論的主観主義の思想を取り除くとき、カントの所説がどういう意義を持つものとして理解され²⁴⁾」るのであるか。「認識論的主観主義の思想を取り除いてしまったとき、カントが「先験的感性論」と「先験的分析論」において見出したものは何であろうか。私はそれは要するに自然というものは物自体ではなくて現象であるということ、そして自然科学的認識とはこの現象についての認識であるということ²⁵⁾を洞察した点に存すると考える」。では「それは一体どういう意味を持つのか」、それは「われわれがわれわれに現われる姿での自然を把握すればそれでよいのであり、それ以上のことを問題にすべきではないということの意味するであろう。言いかえれば、われわれは人間的立場から自然を見、自然の認識を行うべきであって、それ以上に自然の奥に何が存するかを問うべきではないということであろう²⁶⁾」。カントは、「自然現象の本質を、その隠れた本質をとらえようとする」近世以前の自然研究に対し、「ただ自然現象はいかにあるかということのみを問題」にする「近世自然科

22) 同上, 29頁。

23) 同上, 31—32頁。

24) 同上, 53頁。

25) 同上, 174頁。

26) 同上, 175頁。

学の本質を見事に洞察したとすることができる」。²⁷⁾「われわれは人間立場を越える必要はない、われわれは現象としての対象を把握すれば、そこに人間的立場から見た真理をとらえるのだという考え方こそ、認識論的主観主義というほころびた衣裳をつけてカントが示そうとしたこと²⁸⁾であった」。そして、「カントのなしとげたコペルニクス的転回はカント自身の言うような認識論的主観主義の思想に存するのではなく、その奥にある真理観の転換すなわち、真理というものを無限者的立場からではなく、有限者的立場から見直そうとする点に存する²⁹⁾」と岩崎博士は語られる。

岩崎博士は形而上学における「置き入れ」—博士においては「投げ入れ」—を経験から独立な主観のア・プリオリな形式の置き入れと解され、自然科学における実験的方法としての「置き入れ」と区別されると共に、前者の「置き入れ」を認識論的主観主義の思想と見做し、その思想を実験的方法と矛盾するものとして排除された。しかし、このような批判的見解の根底には、形而上学に導入された実験的方法が自然科学のそれと同一性格のもでなければならぬと言う前提が存しており、実はこの前提がカントにおいて成り立つかどうか甚だ疑問である。さきに述べたように、カントは形而上学における「置き入れ」を語る場合にア・プリオリな認識と言う言葉を挿入するが、物理学の場合にはその言葉を挿入していないのである。形而上学における実験的方法は自然科学におけるそれと同一の性格を持つのではなく、あくまで「自然探求者に倣った方法」(BXVIII Anm.)である。そうすると、認識のア・プリオリな主観形式の「置き入れ」を、自然科学における実験的方法としての「置き入れ」の観点から、実験不可能なものを実験すると言う矛盾を犯すものと考えすることはできないであろう。また、岩崎博士はカントのコペルニクス的転回を認識論的主観主義と解しておられるが、この解釈にも問題がある。博士は認識論的主観主義について、「一方において対象の主

27) 同上, 176—177頁。

28) 同上, 179頁。

29) 同上, 181頁。

観からの独立性を認めねばならず、他方において対象が主観の先天的な認識形式によって構成されたものであると考えようとするのは本来両立し得ない要求を含んでいた³⁰⁾」と言われるが、カントは対象を主観から全く独立したものと考えていなかった。博士も認めておられをよきに、カントは現象（経験の対象としての現象）のみを認識し得ると考えており、この場合の現象とは我々が経験において出会う対象自身なのである³¹⁾。カントが『純粹理性批判』において「経験はいかにして可能であるか」と問う場合、カントは我々の認識とまったく無関係な対象がまず独立に存在することを前提し、しかるのちに我々がいかにその対象を認識するかと問うのではない。カントはその経験の可能性への問いを通して、存在者がそこにおいて対象として我々に顕わになる可能的経験の構造と範囲とを明確に規定せんと試みるのであり、存在者が対象として我々に顕わになる場の構造を問わんとするのである。そうすると、博士の言われる認識論的主観主義の思想をカントの思想とすることはできないと言えよう。最後に、カントのコペルニクスの転回において博士の言われるよう真理観の転換が結果することは、カントにおいても認められるところである。しかし、カントのコペルニクスの転回を単に近世自然科学の本質の洞察と評価される点はどうであろうか。博士は、近世自然科学の本質を、自然科学においては自然現象の隠れた性質が問われるのではなく、ただ自然現象がいかにあるかと問われる、と言うことの内に見い出しておられるが、カントはコペルニクスの転回においてあくまで思考法の革命を問題にしていたのではなかったか。思考法の革命と言う観点から見れば、近世自然科学の本質はその公理的性格の内にあると言うべきであろう。さきに述べたように、自然科学の実験的方法における実験の本質は法則の確認にあり、物体のみならず実験さえも理性が自ら企画し、産出したもの（公理系）に基づいて可能になると言う点にこそ近世自然科学における思考法の本質があった。そうして、このような新たな自然科学における思考法とカントの所謂コ

30) 同上, 172頁。

31) A393.

ペルニクスの転回が比べられたのであれば、形而上学におけるコペルニクスの転回と自然科学における実験的方法との類比も思考法の革命に限定して考えるべきである。博士のコペルニクスの転回の評価は思考法の革命の本質と言うより、その革命の結果に議論が移行してしまっているようである。

以上、カントのコペルニクスの転回を自然科学における実験的方法の形而上学への導入と解する二つの見解を吟味したが、それらの見解は共に自然科学における実験的方法と形而上学に導入された実験的方法とを同一視する一高坂博士は自然科学における実験をカントに引きつけて解釈されており、岩崎博士は逆に形而上学における実験を自然科学のそれに引きつけて解釈されている—と言う前提に立っていた。そして我々はそれらの見解に同意することができなかった。カントはむしろ両者の方法を別のものと考えている。ではカントの思考法の革命（コペルニクスの転回）の本質はどこにあり、数学、物理学、形而上学におけるそれぞれの思考法の革命はいかなる意味において類比を以て語られるのであろうか。

四

カントは自己の形而上学における思考法の革命たるコペルニクスの転回を述べた箇所（本稿一において引用）に続いて、「ところで形而上学においても、人は対象の直観に関してはこれと類似した方法でこれを試みることができる。もし直観が対象の性質に従わなければならないとすれば、いかにして人が対象の性質について何事かをア・プリオリに知ることができるか、私にはわからない。しかし、（感官の客観としての）対象が我々の直観能力の性質に従うのであれば、私はこうした可能性を十分に考えることができる。しかし、これらの直観が認識となるべきであるならば、私はこれらの直観に立ちどまっていることはできず、表象としてのこれらの直観を対象としての何か成るものに関係付け、この対象を表象によって限定しなければならない。それ故、私がそれによってこの限定を成し遂げるところの諸概念もまた対象

に従うと想定するならば、その場合には私は再び、私がおの対象についてア・プリオリに何事かを知り得る仕方について同様な当惑に陥ることになる。しかしそうではなくて、対象あるいは同じことであるが対象がそこにおいてのみ（与えられた対象として）認識されるところの経験が、これらの概念に従うと私が想定するならば、その場合には私は直ちに一つの層容易な解決策を見出す。なぜなら、経験そのものが悟性を必要とする認識様式であり、私は悟性の規則を私に対象が与えられるに先き立って、したがってア・プリオリに私の内に前提しなければならず、この規則は概念の内であ・プリオリに表現されているのであるから、経験のすべての対象は必然的にこの概念に従ひ、この概念に一致しなければならないからである」（BXVII—XVIII）と述べている。

形而上学の課題において、対象が我々の認識に従わなければならない、と想定するカントの新しい思考法は上記のような仕方で展開され、それによって対象についてア・プリオリな認識が獲得されることになる。換言すれば、空間・時間と言う我々の直観形式とカテゴリー（純粹悟性概念）と言う我々の思惟形式が経験を可能ならしめる形式的制約として析出され、これら経験の可能性の諸制約の解明に基づいてア・プリオリな総合的判断（対象についてのア・プリオリな認識）の可能性が示され、対象についてのア・プリオリな認識が原則として示されるのである。カントにおいては対象は経験を通して我々に与えられると考えられている。そして「我々のすべての認識はすべての可能な経験と言う全体の内に存しており、このすべての認識に一般的に関わることによって先験的真理が成立する。この真理はすべての経験的認識に先行し、そのすべてを可能にする」（A146, B185）と語る。カントは、自然科学者達によって与えられた、物体の本質的規定の先取的認識が物体の経験的認識を可能にすると言う制約的連関を哲学的に反省し、今や先験的真理が経験的認識を可能にすると言語する。ここでは単に自然科学的な物体の経験的認識とその可能性の制約が問題にされているのではなく、物体を含めてあらゆる経験の対象（現象）の経験的認識と、それに一般的に関わりそれを可能

にする先験的真理とが問題にされている。この先験的真理はア・プリオリな総合的判断であり、経験一般の形式をア・プリオリに表象するが、この総合的判断は対象についてのア・プリオリな認識として同時に自然一般をア・プリオリに可能にするような法則とも言われる¹⁾。そうすると、カントが形而上学において語る「置き入れ」の方法は、我々の認識能力に基づいて可能になったア・プリオリな総合的判断（先験的真理）が経験一般の形式をア・プリオリに表象し、その経験一般の形式の先取的認識を通して同時に経験における対象一般の形式（対象の対象性）を確定すると言うことの内に求めなければならない。「我々は自ら物の内に置き入れたもののみを、物についてア・プリオリに認識する」(BXVIII)とは、先験的真理がすべての経験的認識に先行し、すべての経験的認識を可能にすることによって、同時に経験の対象を可能にすることを意味しており、「我々が自ら物の内に置き入れたもの」とは、経験において我々が物（対象）に出会うに先き立って、その出会いの形式を決定するような経験一般の形式（先験的真理）であり、「我々が物についてア・プリオリに認識するもの」とは、その出会いの形式が同時に我々が出会う対象の形式を決定するので、我々が経験において出会う対象一般の形式（先験的真理）に他ならない。カントのコペルニクス的転回の本質はこのような先験的真理と経験的認識の制約連関の洞察に存するのである²⁾。

カントのコペルニクス的転回の本質が上記のようなものであとして、数学、物理学、形而上学のそれぞれの方法が「置き入れ」の方法として共に特徴付けられ、類比を以って語られるが、その類比はいかなるところに成り立つのであろうか。

カントは数学における公理を「直接に确实である限りのア・プリオリな総合的原則」(A732, B760)と解している。つまり、我々は純粹直観における数学的な構成を通して数学的な対象についてのア・プリオリな総合的認識を持ち得るのである。しかし、公理においてこのようなア・プリオリな総合

1) 経験の可能性をめぐる議論については前掲の拙稿を参看されたい。

2) Vgl. M. Heidegger (2); a. a. O., S. 26.

性が認められることは、公理が数学的思惟の自発性による自由な指定に基づくものであることを示している³⁾。数学における「構成」の方法の背後には思惟の自発性が考えられており、この自発性に基づく公理の自由な指定に基づいて初めて数学的な対象の諸性質が認識される。そうして、数学的認識が一方で一定の公理を頂点とする演繹的な体系を形成するものであれば、公理そのものの自由な措定は数学的な対象の在り方を思惟の自発性に基づいて予め企画することに他ならない。この思惟の自発性に基づく企図こそ数学における「置き入れ」の方法（「構成」の方法）を支え、可能にしているものと言えよう。

では物理学の「実験的方法」においてもこのような思惟の自発性に基づく企画が考えられないであろうか。

我々はさきあらゆる物体の規定がその内で予示される根本見取図の企画としての公理的企投について言及しておいた。その議論より明らかなように、この企投もやはり自然科学における思惟の自発性に基づく公理の自由な措定（自然探求における相対的に固定されたある立脚点の選択）と考えられるのであり、その企投に基づいて自然科学の対象も可能になった。

数学と物理学の「置き入れ」の方法の内にはそれぞれ公理の措定をおこなう自由な思惟の自発性に基づいて措定される公理がそれぞれの学の対象そのものの在り方の先取的認識を表現し、同時にその対象領域を限定した。では同様なことが形而上学においても考えられないであろうか。

カントは存在者への関わりの本質の解明と言う存在論の課題を、経験の可能性、つまり経験を可能ならしめる形式的制約の解明として遂行する。空間・時間・カテゴリーが経験の可能性の制約であるとは、それらが経験における主観—客観—関係の形式的制約であることを意味し、それらの諸制約に基づいて成立する先験的真理としてのア・プリオリな総合的判断は経験における主観—客観—関係一般の構造の先取的認識である。そうして、その先取的認識を通して初めて経験的認識が可能になり、その経験的認識において我々

3) Vgl. G. Martin; a. a. O., S. 23.

に対象が与えられるのであれば、存在者が我々に対して対象として顕わになることを可能ならしめるもの、つまり存在者を存在的にするものとは先験的真理と言わねばならない。さきに述べたように、先験的真理は経験一般の形式の予料を通して経験における対象一般の形式を確定するものであった。しかもそのような真理は思惟によってア・プリオリに予料されるのである⁴⁾。そうすると形而上学における「置き入れ」の方法においても思惟の自発性に基づく公理の自由な措定が考えられないであろうか。なぜなら、先験的真理は存在者を初めて存在的にするような経験における対象一般の先取的認識（対象の対象性の認識）であり、思惟はそれらの認識を端的に確実につまりア・プリオリな総合的判断として予料するのであるから、我々に対象として現われる存在者の一般的な本質的規定の先取的認識たる先験的な真理は、思惟によって、端的に確実なもの、「是認されたもの ἀξιώματα」という意味で、「公理」あるいは「原一則 Grund-Sätze」としてア・プリオリに措定されることになるからである。それ故、形而上学の「置き入れ」の方法においても存在者一般（対象一般）についての公理的企投が考えられており、その企投に基づいて形而上学の対象領域も限定されると言えよう。

カントは「置き入れ」の方法における公理の自由な措定に関し常に思惟の自発性を考えており、形而上学において明らかにされた原則（公理）に基づいて数学と自然科学の公理が可能になると言われるのであるから⁶⁾、いまや一つの思惟の根源的自発性のそれぞれの学における自己展開として「置き入れ」の方法を考えることができることになる。カントがそれぞれの学における思考法の革命を、それぞれの学の性格の違いにもかかわらず、一様に「置き入れ」の方法として性格付けるのは、このような思惟の根源的自発性がそれらの方法の背後に考えられるからである。そうして、一つの思惟の根源的自発性がそれぞれ異なる学における公理の自由な措定に関わるならば、それ

4) Vgl. A246, B303.

5) M. Heidegger (1); a. a. O., S. 71.

6) A733, B761; Bd. IV. S. 470.

それぞれの学の思考法の革命はまた「置き入れ」の方法として類比を以って語られ得ると言わねばならない。カントは数学と物理学の思考法の革命を考察するにあたり、それぞれの「置き入れ」の方法を主導する思惟の自発性へと立ち帰り、その反省において、形而上学の可能性を決定付けるような形而上学的思惟の自発性を類比的に洞察するのである。

ところで、対象として現われる存在者の根本的本質的規定を原則として措定する思惟の自発性と言う思想の内には、「存在者はその表象されてあることにおいて存在的となる⁷⁾」と言う近世形而上学的思惟の根本動向が看取されないであろうか。さきにも述べたように、先験的真理としての諸原則が我々の思惟によってア・プリオリに予料され、それらの原則に基づいて存在者が初めて存在的になる（対象が対象として我々に対して立てられる）のであれば、カントのコペルニクス的転回の内にもこのような近世の形而上学的思惟の根本動向が働いていると言えよう。ハイデggerはこのような根本動向を簡潔に「世界が像になり、人間が主体となる⁸⁾」と言い表わしている。桂寿一博士はこのような動向を「近世主体主義⁹⁾」の名で呼ばれ、コペルニクス的転回の一面として、その転回を「近代科学の「主体（観）性」とも言うべき性格の指摘」、つまり、「近代知」特に近代科学について「近世主体主義」を表明したものと解しておられる¹⁰⁾。しかし博士のように、コペルニクス的転回を、自然科学における実験的方法が抛って立つ前提をそこに取り出し是認したものと解することができるであろうか¹¹⁾。

確かに、カントがその思考法の革命を数学と物理学における思考法の革命に倣うと言う仕方導入するのは、数学における「構成」の方法と物理学における「実験的方法」に対する反省が形而上学における思考法の革命への手

7) M. Heidegger (3); Holzwege. 4 Aufl. Frankfurt/M 1963, S. 83.

8) *ibid.*, S. 85.

9) 桂寿一；『近世主体主義の発展と限界』・東大出版会，14頁。

10) 同上，221頁。

11) 同上，

引きとなっていることを示している。特に、自然科学における物体の本質的規定の先取的認識と物体の経験的認識の制約連関と、その先取的認識を公理として自由に措定する思惟の自発性とを哲学的に反省することが、カントのコペルニクス的転回への道を準備したことは認めなければならない。しかし、カントが1772年のM・ヘルツ宛の書簡において、「我々の内において人が表象と呼ぶところのものがいかなる根拠に基づいて対象に関係するか」と言う問いを形而上学の全秘密を解く鍵として自問し、カントがコペルニクス¹²⁾的転回に続いて『純粹理性批判』において語ることになるあの空間・時間・カテゴリーについての議論を、そこで既に簡潔に展開している。このことから明らかなように、カントのコペルニクス的転回は端的に形而上学の可能性へと向けられているのである。しかも、その形而上学は存在論として単に自然科学の基礎付けを目指すものではないことはさきに述べたところである。桂博士の言われる「近代科学の「主体（観）性」は思惟の自発性に基づく自然科学的な公理の自由な措定において看取されるが、このような思惟の自発性は形而上学における思惟の自発性とは一応区別される。そうすると、博士のようにカントのコペルニクス的転回を単に近代科学について「近世主義」を表明したものと言うことはできないであろう。カントのコペルニクス的転回がハイデッガーの指摘するような近世的思惟の根本的動向の内に生起するとしても、カントがその思考法の革命において目指すものは第一に形而上学であり、自然科学の実験的方法を支えている公理的企投そのものの哲学的反省を通して形而上学を基礎付けようとするのである。形而上学における思惟の自発性に基づく公理の自由な措定は、対象の対象性 *Gegenständlichkeit* に関わるのであり、物体の物体性 *Körperhaftigkeit* に関わるものではない。対象の対象性の企投は物体の物体性の企投に先行し、一般的にそれを可能にするような思惟の根源的企投である。この思惟の根源的企投は、存在者が何であるべきか、存在者がいかにして我々に対象として現われるか、を予め決定し、対象の対象性の先取的認識を予め確定するからこそ、自然科学者もそ

12) Bd. X, S. 130.

の先取的認識（原則）をその自然探究の不可欠の手引きとして使用することになるのである。なぜなら、その先取的認識に基づいて初めて特殊な形而上学的自然科学としての物理学（物理学の原理的な部門）が可能になるからである。¹³⁾

結 語

以上我々はカントのコペルニクスの転回についての解釈を試みたが、この小論では、コペルニクスの転回を「自然科学における実験的方法の形而上学への導入」と解する見解の吟味に重点が置かれ、コペルニクスの転回と形而上学の基礎付けとの連関については必ずしも十分な議論を展開し得なかった。この点に関する考察は他日を期したい。

13) Bd. IV, S. 470.